

自分の望みが集約された、とても素敵な場所だと思います

海洋葬 海の弔い
契約者様
大槻さんご夫妻
80代

旦那さんのお仕事の関係で海外にいる事が多く、奥様も一緒に同行し、旦那様をサポートしていたという大槻さんご夫妻。諸国の文化を体験し、感じてきた中で、自身の最期に決めた葬送の在り方は、「散骨」という手段でした。現在、アメリカに定住している大槻家のご長男、ご長女のご理解もあり、海の弔いを契約されました。散骨に対する想いをお二人に聞いてみたいと思います。

妙海寺海洋葬を知ったきっかけと説明を聞きたい
と思った点についてお聞かせ下さい

(妻:晏子さん)

きっかけは某新聞に妙海寺さんの海洋散骨についての記事があり、一部を散骨、一部は納骨し供養するというスタイルであるという内容に「これだ」と思いました。お寺が主体となって、供養から散骨までしてくれる事にとっても驚きました。

※大半の海洋散骨は業者が主体となって執り行い、全散骨をベースとしています。

(夫:晃さん)

私は長年に渡り国内外で海の仕事(海洋研究)に携わってきたこともあり、自分の将来を顧みるとき、海に還りたいという強い思いが心の中にありました。

こうして、私と妻2人の思いが重なり合って、妙海寺さんという場所に引き寄せられて来たのだと思います。

散骨を選択された理由をお聞かせ下さい

(妻:晏子さん)

私は20年前から散骨を意識していました。そのきっかけでもあったのが子供たちの海外定住です。息子や娘(大槻家は長男・長女の2人兄妹)は、ともに海外で暮らしています。子供たちがアメリカ国籍を選択した事で日本に帰ってこないことを実感し、私たちは自分の遺骨を海へ散骨する方法を考え始めました。

また、諸外国を訪れる機会が多かった事もあり、その時に見かける外国の墓地が何となく寂しい感じを覚え、日本の墓地についても同じ様に感じていました。それであればいっそのこと、生命の源とも言える海へ撒いてもらいたいという気持ちが強くなり湧き出てきました。20年も前となると散骨という概念がそれほどありませんでしたし、私自身も漁師さんにお願しようといった漠然としたプランを持っているだけでした。どこに頼もうかと考えながら時が過ぎ、最終的に妙海寺さんの海洋散骨に出会えました。

海に対してどのような思いがあるのでしょうか

(夫:晃さん)

私の父は軍人(連合艦隊の航海参謀中佐)だったのですが、太平洋戦争の最中に艦隊司令長官であった古賀峯一と共に飛行艇に乗った後、消息が分からなくなりました。おそらく太平洋のどこかに沈んでしまったのではないかと当時の状況から推測しています。そうして時が過ぎましたが、これまでは父が亡くなった場所や父に対しての関心というのはそれほどありませんでした。

しかし、某新聞に連載されていた小説、池澤夏樹さんの「また会う日まで」(池澤夏樹の祖母の兄にあたる、天文学者にして海軍軍人だった秋吉利雄の生涯を淡々と描いたもの)を読み続けていたところから少しずつ状況が変わってきました。海という繋がりを通じて私と父の境遇が似ている事も分かり、父の事に対してあまり調べたことがなかった私ですが、父がどんな生活をして、どんな思いを持って生きて来たのか、日を追うごとに気になりだし、最近では共感する部分も多くなってきたほどです。

いずれは海に還りたいと、先ほど話をしましたが、この散骨を通して、どこで亡くなったか分からない父を知ることができるような気がしています。

ご家族の方と海洋葬について、妙海寺についてどのように話をされたのですか？

娘にあっては「お母さんたちが散骨された後、私たちはどこで拜んだら良いの？」とよく聞いてくることがありました。そうした中で「海の弔い」の特徴でもある「遺骨の一部は堂に納められ、散骨後もお寺でしっかりとした供養が続けられる」という妙海寺独自の供養を説明したところ、娘も安心してくれるようになりました。

まだ娘、息子家族はお寺に来たことがないので、綺麗な海が見渡せるこんなに素晴らしい場所であることを未だ知りません。皆海外に家庭をもって住んでいるので、揃ってお寺に来ることは難しいと思いますが、いつか足を運んでもらい、このお寺の雰囲気なども含めて、私たちがこの場所を選んだ理由を分かってもらえればと思っています。余談ですが、息子は釣りが大好きなので、お参りのあとは存分に釣りを楽しんでもらえれば、なんて考えていたりします。

どのような散骨にしたいと思いますか？

どちらかが最初に亡くなる訳ですが、散骨の時は2人一緒に散骨してもらいたいと思っています。別々となるとこの広い海の中ですから、お互いどこにいるか分からなくなるのは寂しいですね。最後まで夫婦共に、海に還ることができるのならば、それはとても喜ばしいことです。

また、海流にのりながら子供たちのいる西海岸カリフォルニアの海までたどり着ければ最高です。海はどこに行こうとも1つに繋がっているわけですから、海のどこであろうとも私たちはいるよと、子供たちや孫たちにはそう思ってもらいたいです。

最後に、陶芸で学んだ技術を活かして、自分のお遺骨を入れる骨壺を作りたいと思っています。これから頑張って製作に励みたいと思います。